

## 編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	25
発行年	1981-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019329">http://hdl.handle.net/10114/00019329</a>

## 編集後記

最初の編集計画としてかなり充実した卒論を来年三月卒業の人々のために、参考ともなればと、五六本を一つの柱とし、第二には小田切先生から法政日本文学科の歴史を編集部が訊くという企画をし、四月ごろよりその作業に着手した。ところがすべてテープを起しこれを原稿とし、さらに小田切先生に補足をお願いしたりしたため、原稿の完成が遅れ、最初予定の九月発行が延引し、早目にと考えた卒論の分がずれてしまったことは誠に残念だと思っている。まだ完成間際の卒論執筆もあることと思うので、いささかの役に立つであらうし、何も今年のみに限らず、次年度、その次とこれはかなり有効であると考えている。

第二の柱とした小田切先生のインタビューは日本文学科創科からの分が未着手なので、これは次号に当時の卒業生数名によって座談の形式で補充し、日本文学科が国文学科時代から昭和十年ごろまでを第一期、小田切先生の関連しているその後戦前までを第二期とし、その後の戦後篇を第三期として一つの記録が出来上る。これは法政大学百年史の中に

も記載されていない文学部の一端をも補填出来るものと考えてる。

ただ第二期が本号に、第一期が次号になるとはなるが、第三期まで一貫すれば順序にこだわることはないものと思う。

論文ははじめ二篇であったのだが頁数の関係で永松氏の一篇だけとなり、またその他の執筆者の稿も次号におくることになり次回までお待ち戴きたい。

誌要の内容を充実させるのは一つには会員全体の熱情によることで、ただ編集委員がどんなに頑張っても、力の限りがある。それには各自が日本文学科出身である誇りをもって、犠牲的精神で少しずつでも時間を割いて原稿を送って下さることが、誌要全体の活力となっていくのである。

なにしろ編集委員十一名の中で、常時委員会に出席下さる人はさらに少なく、校正など殆んど大学院生の助力を願っている。

そのような状態の中で初校校了という原稿もあり、校正ミスが目につくと思うが、今しばらくお待ち願えれば、徐々にではあるが、校正ミスも少なくてゆけると思うのでこの点も御了解し、次にはもっと完成した姿で目にかけたいと思っている。(鈴木和雄)

※一九八一年度総会(一九八一年七月二十五日)で次のように会則が変更されました。

### 第五章 会計

第八条 本会の会費は在學生は年額八百円(旧五百円)とし、卒業生は年額二千五百円(旧二千円)とし入会金を千円とする。

第九条 本会の会計年度は毎年七月一日(旧四月一日)に始まり翌年六月三十日(旧三月三十一日)に終る。

一九八一年二月一〇日 発行

### 日本文学誌要 第二五号

編集人 鈴木和雄

発行人 西田 勝

東京都千代田区富士見二  
ノ一七法政大学八〇年館  
発行所 法政大学国文学会

電話〇三(264)九七五二

印刷所 図書印刷株式会社  
東京都港区三田五ノ二二ノ一